

令和 8 年 8 月 28 日
地震調査研究推進本部
地震調査委員会

今須断層の長期評価

これまでに行われた調査研究成果に基づいて、今須（います）断層の諸特性を次のように評価した。

表 1 今須断層の特性

項 目	特 性	信頼度 (注 1)	根 拠 (注 2)
1. 断層の位置・形態			
(1) 構成する断層	今須断層		文献 1、2、3、4
(2) 断層の位置・形状	断層の位置 (西端) 北緯 35° 20.3′ 東経 136° 22.5′ (東端) 北緯 35° 19.1′ 東経 136° 28.2′ 地表の断層の長さ 約 9 km 一般走向 N76° W	○ ○ ○ ○	文献 1、2、3、4 文献 2、3、4 一般走向は断層の両端を結んだ方向。
(3) ずれの向きの種類	左横ずれ断層	○	文献 1、2、3、4
2. 断層面の地下形状			
(1) 断層面の傾斜	ほぼ鉛直	△	ずれの向きおよび地形の特徴から推定。
(2) 断層面の幅	上端の深さ 約 0 km 下端の深さ 15－20 km 程度 断層面の幅 15－20 km 程度	◎ △ △	地形の特徴から推定。 地震活動 (D100) から推定。(注 3) 断層面の傾斜と地震発生層の深さから推定。
(3) 断層面の長さ	不明	—	
3. 断層の過去の活動			

(1) 平均的なずれの速度	不明	—	
(2) 過去の活動時期	不明	—	
(3) 1回のずれ量	1 m程度	△	断層の長さから推定。(注4)
(4) 平均活動間隔	不明	—	
(5) 過去の活動区間	全体で1区間	○	
4. 断層の将来の活動			
(1) 活動時の地震規模	M6.4程度	▲	断層の長さから推定。(注5)
5. 地震後経過率			
(1) 地震後経過率(注6)	不明	—	

注1：信頼度は、特性欄に記載されたデータの相対的な信頼性を表すもので、記号の意味は次のとおり。

◎：高い、○：中程度、△：低い、▲：かなり低い

注2：文献については、以下のとおり。

文献1：岡田篤正（1979）：愛知県と周辺地域における活断層と歴史地震．愛知県の地質・地盤，その4：活断層，愛知県防災会議地震部会，122p.

文献2：岡田篤正・東郷正美編（2000）：「近畿の活断層」．東京大学出版会，395p.

文献3：後藤秀昭・石村大輔・岡田真介・堤 浩之・中田 高（2017）：1:25,000都市圏活断層図「彦根東部」．国土地理院技術資料，D1-No.759.

文献4：今泉俊文・宮内崇裕・堤 浩之・中田 高編（2018）：「活断層詳細デジタルマップ 新編」．東京大学出版会，154p.

文献5：Asano, K. and Iwata, T. (2016) : Source rupture processes of the foreshock and mainshock in the 2016 Kumamoto earthquake sequence estimated from the kinematic waveform inversion of strong motion data. Earth Planets Space, **68**:147, doi:10.1186/s40623-016-0519-9.

文献6：気象庁（2016）：2016年4月16日熊本県熊本地方の地震－近地強震波形による震源過程解析（暫定）－. <https://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/sourceprocess/event/2016041601250547near>（2024年1月確認）.

文献7：地震調査研究推進本部地震調査委員会長期評価部会（2026）：「「活断層の長期評価手法（暫定版）」報告書（追補1）」．4p.

文献8：松田時彦・山崎晴雄・中田 高・今泉俊文（1980）：1896年陸羽地震の地震断層．地震研究所彙報，**55**，795-855.

文献9：松田時彦（1975）：活断層から発生する地震の規模と周期について．地震第2輯，**28**，269-283.

注3：主要活断層の評価の中では、断層面の下端の深さは、地震観測結果から推定される地震発生層の下

限の深さに基づいて推定を行っている。2016年に発生した熊本地震の例では、本震のすべり領域が、上記の方法で推定していた断層面の下端の深さよりも更に5km程度深い場所まで延びていた可能性が指摘された（例えば、文献5、6）。そのため、地震の際に実際に活動しうる断層面の下端は、推定された断層面の下端に対して5km程度深くなる可能性があることに留意されたい（文献7）。

注4：文献8による経験式によれば、1回の活動に伴うずれの量 D （m）は、断層の長さ L （km）を用いて、 $D=0.1L$ と表される。

注5：文献9による経験式によれば、活動時の地震規模 M （マグニチュード）は、断層の長さ L （km）を用いて、 $M=(\log L+2.9)/0.6$ と表される。

ただし、長さ20km未満の活断層には適用できない可能性があるため、ここでは信頼度を▲とした。

注6：最新活動（地震発生）時期から評価時点までの経過時間を、平均活動間隔で割った値。最新の地震発生時期から評価時点までの経過時間が、平均活動間隔に達すると1.0となる。

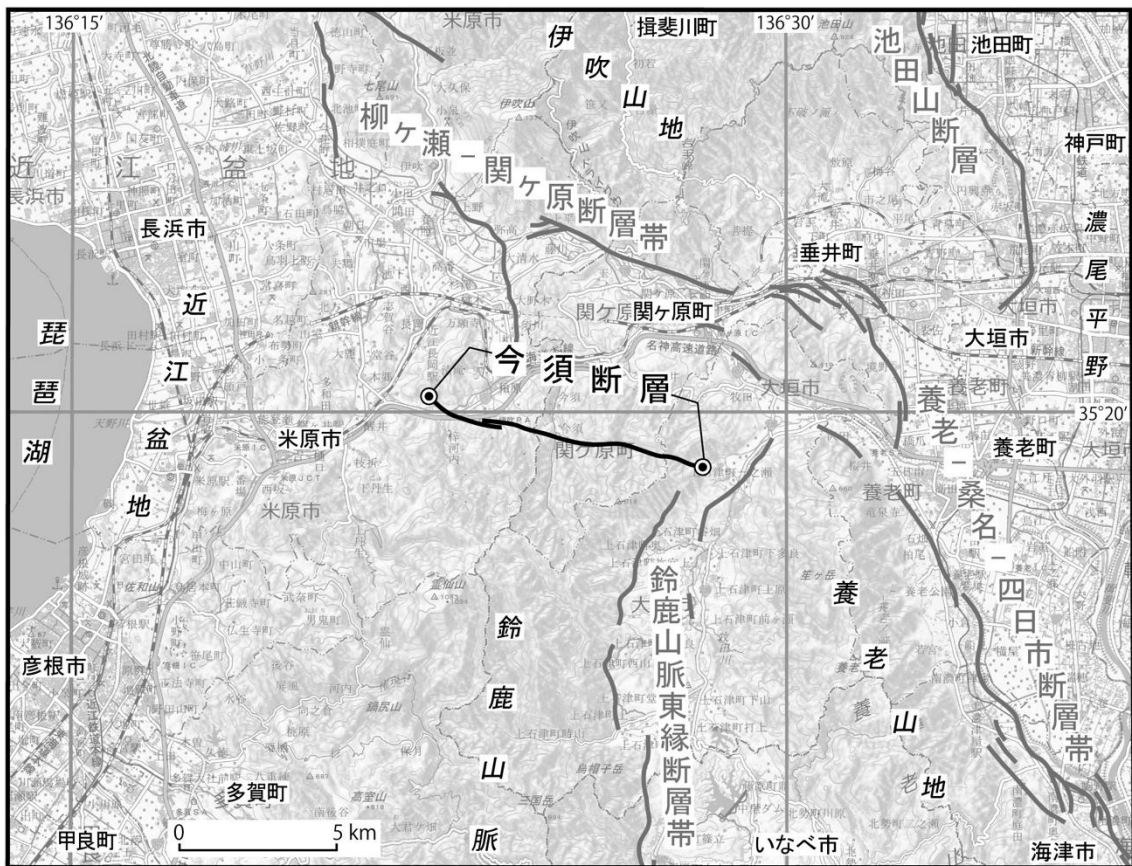


図1 今須断層の位置

◎：断層の端点

基図は国土地理院発行電子地形図 20 万「岐阜」、「名古屋」